

若者の職業意識

Work Consciousness of Youth

永井 広克

NAGAI Hirokatsu

1. はじめに

近年、働くことに対する若者の意識が変化している。高校や大学を卒業しても定職に就かず、学生時代と同様にアルバイトで生活する若者が増えている。フリー・アルバイターいわゆるフリー・タ - が増加している。その数は2002年には209万人に達し、1982年の50万人、1992年の101万人から大幅に増加している。(1)

フリーターには、確固たる将来の目標をみざしているが、生活のためにフリーターをしている自己実現型、漠然とした目標を持ってはいるが、積極的にそれに取り組まず、当面はフリーターをしている将来不安型、定職に就く気はあるのだが、就職難のため正社員になれなかった非自発型がある。(2)

フリーターが増加した背景には、労働観、家庭環境、就業状況の変化がある。若者の間では自己実現が出来る仕事に就こうとする選職意識が強まっている。しかし自己実現ができる職業は少ない。自分が気に入った職に就けなければ、フリーターでも親と同居すれば生活の心配はない。パートやアルバイトの比率が高いサービス産業が拡大し、いくらでも働き口はある。

フリーターは社会に出たモラトリアム人間の姿だと言える。フリーターとモラトリアム人間はほぼ重なる。今や大学生は勉強よりもアルバイトに精を出す傾向が強まっている。アルバイトの合間に大学に顔を出さなくてもよいくらいである。本人たちは学生というよりも、アルバイト従事者という意識が強いのもかもしれない。そんな彼らが大学を卒業しても、フリーターになることにさほど抵抗感をおぼえない。学生とフリーターとの間の垣根が低くなっている。でも学生はいちおう学生証という身分証明証があるが、フリーターにはそれがない。かつては学校を卒業しても定職に就かず、アルバイトで生活している若者をプータロウと呼んで蔑んだが、今は偏見も薄れた。フリーターの数が増え、飲食業やコンビニなどのように、フリーターがいなくては成り立たない業界も増えているので、フリーターが社会的に認知されるようになった。そのために身分証明証がなくても、本人はそれほど気にすることもなくなった。

そこで自己実現型や将来不安型のフリー・タ - が生まれる。これらのフリーターは高学歴社会に見られる豊かな社会の落とし子と言える。フリーターの求人は多いし、親の世代は収入が多いので、収入が少ないフリーターの子どもを養えるようになった。

しかし近年、若者の失業率が高まっている。その割合は1990年代半ばからしだいに上昇し、2002年には15-19歳は12.8%、20-24歳は9.3%、25-29歳は7.1%となっている。(3) フリーターの増加と歩調を合わせるように、若者の失業率が増加している。フリーターの中でも、余儀なくそれを強いられる非自発型のフリーターが増加した。全年齢の平均失業率が6%未満なのに、いかに若者失業率が高いかがわかる。年齢別には20代前半よりも10代後半が多い。これは大学卒よりも高校卒の若者の失業率が高いことを示している。正社員になれないとフリーターになるしかないが、非自発型のフリーターには高校卒の若者が多いことになる。したがってフリーターといっても、十把ひとからげに扱えず、学歴や性別によって、フリーターになった理由やタイプが異なる。大別すれば高校卒は非自発型、大学卒は自己実現型が多いと言える。

大学卒に自己実現型のフリーターが多いということは、いやな仕事では定職に就きたくないという意識の裏返しである。仕事をする動機は、生計費を得るといった物質的なものと、精神的な充実感を得るといった精神的なものがある。大学卒の若者はその精神的な動機を大事にしているようである。

そこで本学を2002年に卒業した若者に、郵送によるアンケート調査を行なって彼らの職業意識について探ってみた。2003年7月に質問用紙を郵送し、8月末に返送を締め切った。卒業生全員の220人に発送し、52人から回答を得た。回収率は24%である。回答者の性別は男41%、女59%である。なお質問文は「現代若者の職業意識」(旧労働省職業安定局編)を参考に作成した。

2. 仕事の実態

仕事の種類は正社員が77%である。本学の2002年度の就職率は9割を超えていたが、それに比べるとやや低い。正社員以外では、派遣・契約社員、パート・臨時、フリーターがそれぞれ数%である。ところでフリーターとは、厚生労働省の定義によれば、「15才から34才のアルバイトかパートしている者」だが、女性は未婚者、男性は職歴1~5年未満の者で、失業者のなかでも正社員でなく、パートかアルバイトを希望する者となっている。(4) その定義に従えば、派遣・契約社員、パート・臨時もフリーターに含まれることになる。そうすればフリーターは27%になる。

表1 性別と仕事の種類⁽⁵⁾

	正社員	派遣・契約	パート・臨時	フリーター	計
男	12人 70%	2人 12%	0人 0%	3人 18%	17人 100%
女	23人 77%	2人 7%	4人 13%	1人 3%	30人 100%
計	35人 74%	4人 9%	4人 9%	4人 9%	47人 100%

表2 転職と仕事の種類

	正社員	派遣・契約	パート・臨時	フリーター	計
転職あり	4人 8%	2人 4%	0人 0%	0人 0%	6人 12%
転職なし	34人 66%	2人 4%	4人 8%	4人 8%	44人 88%
計	38人 75%	4人 8%	4人 8%	4人 8%	50人 100%

中高年の女性が再就職した場合は、ほぼすべてが正社員ではなく、パートになる。女性の就業率が上昇したといっても、年齢別に見れば、若い女性は正社員、中高年はパートが一般的である。

本調査のように若い女性の場合、正社員は8割近くに達する。かえって男性の正社員の割合の方が低いが、これは標本数が少ないためであろう。したがって性別による正社員の割合の違いは認められない。ただ派遣社員や臨時などを含めたフリーターが3割に達しているのが注目される。これは卒業した時点では正社員だったが、なんらかの理由で退職し、フリーターになった者もいると考えられる。

そこで転職と仕事の種類をクロス集計すると、卒業時点で、派遣・契約社員とパート・臨時を含めてフリーターの割合を見ると、20%にのぼる。派遣・契約社員で転職したものは4%にすぎないのに、正社員の転職者は8%になる。したがって転職してフリーターになる者より、転職しても他の企業の正社員になる方が多い。

職種は、事務職、営業職、販売職そして専門職が多い。

業種はサービス業、卸・小売業が多い。

勤務先の企業全体の従業員数は、「99人以下」が一番多く、次いで「100-999人」と「千人以上」が並ぶ。中小企業が多いが、大企業に勤めている者もそれなりにいる。要するに、中小企業のサービス業の事務職が多い。

3. 職場の選択と不満

たくさんの企業から現在の勤務先を選んだ際、影響を受けたものは、「企業訪問、求人説明会などで会社から直接聞いた話」、「両親などの家族の意見、話」、「求人情報誌などの情報」が多い。逆に「大学の先生の意見、話」、「テレビ、新聞、雑誌、本などの情報」、「アルバイト、家事手伝いなどの経験」が少ない。

何といっても、興味や関心のある企業を訪問し、求人説明会に足を運ぶことで就職先を選んでいる。そもそも興味があるし、じかに接して得た情報は説得力がある。次いで親、きょうだいなど肉親から聞いた企業の情報や、就職に対する彼らの助言が大きな影響を与える。その次に求人情報誌がくる。間接的な情報はそれほど信頼されていない。興味を示し、自分が積極的に足を運んだ企業に就職していることになる。

一番影響を受けなかったのは「大学の先生の意見、話」である。大学の教員はゼミ生に対する就職支援を積極的に行なっているが、その割に学生は教員をあてにしていないようである。求人情報誌は求人案内が掲載されているので多少影響を及ぼしているが、「テレビ、新聞、雑誌、本などの情報」はそれほど影響を与えていない。テレビは見るが、新聞、雑誌、本などにはほとんど読まない若者のメディアの接し方が背景にあるのかもしれない。(6) また在学中のアルバイトも就職とは結びつかない。アルバイトはあくまでお金を稼ぐことが目的であり、自分の将来を考える材料ではない。

アルバイトと異なり、定職は給料をもらい生活の糧とするだけでは、張り合いがない。なんらかの精神的な充実感が得られないと、その仕事を一生続ける気にならず、転職することにもなる。

職場についての不満は、「会社や上司の方針に納得できない」が一番多い。仕事が楽しくできる条件は、

職場の人間関係が良いことだが、方針に納得できないということは、職場の雰囲気や上司、同僚との人間関係が良くないことを含んでいる。転職理由も一般に人間関係の悪さやもつれやが多い。

次いで「給与や昇給がよくない」「仕事がきつい」が続く。仕事の物質的な側面である給料の不満が二番目である。給料が安いということであり、仕事に見合った給料をもらえていない。仕事が楽ならば給料が多少安くても我慢できるが、仕事がきついと給料の少なさが身に染みる。

逆に不満が少ないのは「仕事に自分が生かせない」「時間外のつき合いが多い」「通勤時間が長い」などである。若者は仕事に自己実現を求めると言われるが、その割には「仕事に自分が生かせない」ことに不満を感じていない。仕事の物質的な側面である生計費を稼ぐ、ということに比べ、精神的な側面である自己実現は、ある意味では贅沢な欲求なので、それほど満たせなくても不満に感じないのだろう。「時間外のつき合いが多い」に関しても不満が少ないのは、公私を区別する気持ちから、仕事以外のつき合いをできるだけ避けるようにしているし、不況の折り、客の接待や社員旅行など余計な費用を切り詰め、実際に仕事以外のつきあいが減っているためかもしれない。通勤時間に関しても不満が少ないが、富山県は職場が比較的近いので通勤時間がそれほどかからないためである。

4. 仕事についての考え

職業の意味は3つある。まず第1に、衣食住の糧を得る生計の維持、第2に、自己実現や能力発揮としての個性の発揮、第3に社会的役割の実現である。(7)

この3つの意味が満たせれば理想の職業と言うことになるが、そんな職業はまずありえない。これらの意味をそこそこに満たせれば、自分の職業に満足する。

そこで仕事についての考えを聞くと、「仕事は会社に役立つことを第一に考えるべきであって、自分の興味・関心のためにするものではない」「おもしろい仕事であれば、給料が安くてもかまわない」「職場の同僚、上司とは勤務時間以外はつきあいたくない」などが多い。

若者は個人主義的傾向が強いと言われるが、本調査では自分のことよりは、会社中心に考えている。よく、デートを約束した日に上司から残業を命じられると新人社員はどうするか、という調査が行なわれるが、そんな調査で言えば、デートより残業を優先するということである。まだ就職して1年余りだし、仕事を覚えるのに精一杯で、私生活より仕事優先すべきだという考えである。さらに不況もからんでいるのだろう。今の会社をやめるわけにはいかないのである。

不満について、「仕事に自分が生かせない」「仕事に意義が感じられない」「仕事に創造性が発揮できない」といった自己実現に関するものは不満度が低かったが、「おもしろい仕事であれば、給料が安くてもかまわない」が、ほぼ「仕事は会社に役立つことを第一に考えるべきであって、自分の興味・関心のためにするものではない」と並んで多い。給料の多寡よりも毎日、張り合いを持って、楽しく仕事をしたいという気持ちである。仕事に生きがいを見出したいのである。不況で就職難が叫ばれているにしろ、ぜいたくを言わなければ何らかの職に就ける世の中なので、生活費を得るために働くことよりも、より高次の職業の意味で

ある自己実現を仕事に求めている。

とは言っても仕事だけの人生ではつまらない。仕事は仕事、私生活は私生活とはっきり区別したい。「職場の同僚、上司とは勤務時間以外はつきあいたくない」が三番目にくる。これも不満度に関しては「時間外のつきあいが多い」が低かったが、景気低迷と新入社員の個人主義的な傾向があいまって、実際、時間外のつきあいが減っているのであろう。

これら上位3つをまとめると、以下のようなになる。就職して1年余り立ち、仕事の楽しさや厳しさがある程度わかるようになり、腰かけといった甘い気持ちでは仕事はやれないし、自己中心ではいけない。あくまで会社の一員として、仕事に励むべきである。でもお金のためだけに仕事をするのはつまらない。できれば充実感を持って仕事をしたい。また同じ職場の人たちとはあくまで仕事だけのつき合いをしたい。生活全般にわたるベタベタしたつきあいは敬遠したい、と考えている。

逆に低いのは、「専門的な知識、技術を身に付けることは、大企業に就職することより価値がある」「自分の仕事が残っていても定時に帰るべきだ」「通勤時間が短いことが何より大切だ」などである。

大学は主に教養を身に付ける教育機関なので、専門学校のように、就職に直結する専門知識、技術を身に付けようと入学する学生は多くない。そのことを反映して専門的な知識、技術を身に付けることより、どんな仕事でもかまわないから名の通った大企業に勤めたがる。不満度に関しては「労働時間が長い」がそれほど高くなかったが、仕事が残っていれば残業もいとわない。「通勤時間が短い」は不満度も低かったが、実際にそれほどかからないから、どうでもよいのだろう。

ところで在学中のアルバイトの経験は職を選ぶ際、余り影響を及ぼさないが、回答者の大半がアルバイトを経験している。その期間は2年以上であり、大学在学中ほとんどアルバイトをしているものと思われる。その内容は、販売・サービスが大部分である。客相手の単純労働であり、大学を卒業してから就く仕事とは関連が薄い。お金を稼ぐ苦労は幾分味わっただろうが、年季を積んで一人前になる仕事はアルバイトにはない。

ちなみに筆者が担当している現代社会論の受講生に行なった調査によれば、アルバイトで得たお金の使い道は「衣服など身の回りのものを買うため」が一番多く、次いで「家賃や生活費を得るため」と「社会的な経験を積むため」が続く。(8) アルバイトをして社会経験を積み、職業を選ぶ目安にしたいと考える学生はそれほど多くはない。しかし「旅行やレジャーの費用を得るため」はごく僅かで、「身の回りのものや生活費を得るため」はるかに多い。世に喧伝されるほど、大学生は遊興費を稼ぐためだけにアルバイトをしているわけではない。

今の仕事を選んだり、場合によっては転職する際、自分がどんな仕事に適しているを認識する必要がある。むろん試行錯誤しながら自分に適した仕事を見つけるのが一般的であろう。在学中であれ、卒業後、仕事に就いてから、適、不適を見出すのであれ、自分がどんな仕事に適しているか、ある程度把握しているのは7割を越える。

その理由は、「自分の性格や能力を考えて」が圧倒的に多く、次いで、「実際にその仕事をやってみてそう思ったから」「親や友人からそう言われたから」が続く。

回答者は会社員がほとんど、職種は事務職と営業職が過半数なので、似通った仕事に就いていることになり、バラつきは少ない。でも性格や能力をある程度考慮して現在の仕事に就いている。具体的には地味な性格だから事務職、明るい性格で人と接するのが好きだから営業職に就いたということであろう。しかし自分の性格や能力を見極めて就職する人は少ない。大部分はゆきあたりばつりに現在の職に就き、最初は違和感を感じたものの、実際にその仕事をやっているうちに、しだいに自分に向いていると思うようになったのである。また親や先生など周囲の人の意見を聞いて職を選んだという人も割と多い。自分の性格や能力はかえって周囲の人がよくわかっている面もある。周囲の人に助言を聞き入れて今の職に就いたのであるが、親や先生のコネで就職したということもあるだろう。

今の仕事にどうしても満足できない場合は転職することになるが、転職する場合も、初めて就職する場合も、ハローワークや大学の就職課に望むものは、「就職全体についての相談」「求人情報の提供」「面接、採用試験についての指導、情報提供」などが多い。就職しようとする学生にとって、履歴書の書き方、就職試験の内容などわからないものだけである。技術的なことに加え、学生から社会人になることへの不安もある。就職すること全般にわたる相談に、親身になってのってほしいと希望している。

「求人情報の提供」や「面接、採用試験についての指導、情報提供」はその具体的な内容である。自分の適職がある程度わかるようになると、その職種を捜さなければならない。その職種の求人情報や具体的な試験の受け方を教えてほしいのである。

5. おわりに

以上、本学を2002年度に卒業した若者の職業意識をざっとみてきた。標本数が少ないので一般的な若者の職業意識を表わしていないかもしれないが、その一端はうかがえたはずである。それを要約しよう。

まず勤め先を選ぶ際、影響を受けたものは、「企業訪問、求人説明会など会社から直接聞いた話」「両親などの家族の意見、話」「求人情報誌などの情報」などである。

現在勤めている職場についての不満は、「会社や上司の方針は納得できない」「給料や昇給がよくない」「仕事がきつい」などである。

仕事についての考えは、「仕事は会社に役に立つことを第一に考えるべきであって、自分の興味・関心のためにするものではない」「おもしろい仕事であれば、給料が安くてもかまわない」「職場の同僚、上司とは勤務時間以外はつきあいたくない」などである。

自分がどんな仕事に適しているか、自分なりに把握しているという回答が三分の二を占めたが、その理由は「自分の性格や能力などを考えて」「実際にその仕事をやってみてそう思ったから」などである。

以上のことから、学生時代に自分に適した仕事のある程度把握し、意中の企業を訪問したり、説明会に出席して就職したが、いくぶん不満もある。しかし仕事は会社中心に考えるべきであって、自分のわがまは許されない。とは言うものの、お金のためよりも精神的な充実感が得られる仕事がしたい。そして公私を区別し、自分の私生活を大事にしたいという若者の職業意識が浮かび上がってくる。

注

- (1)北日本新聞 8月27日。
 (2)山田昌弘『家族というリスク』勁草書房 2001年 124-125頁。
 (3)北日本新聞 6月26日。
 (4)長山靖生『若者はなぜ「決められないか」』ちくま新書 2003年 26頁。
 (5)合計が47人となっているが、3人が性別不明である。彼らは正社員だと回答しているので、その3人を加えれば正社員は38人76%となる。
 (6)岩井紀子・佐藤博樹(編)『日本人の姿』有斐閣 2002年 232頁。
 (7)安藤喜久雄(編)『若者のライフスタイル』学文社 1998年 96頁。
 (8)03年度、前期の現代社会論の授業で行なった。

以下は単純集計である。

問1 あなたの現在の仕事の種類は何ですか

- | | | | |
|--------|------------|-----------|----------|
| 1. 正社員 | 2. 派遣、契約社員 | 3. パート、臨時 | 4. フリーター |
| 77% | 8% | 6% | 8% |

問2 現在の職種は何ですか

- | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1. 事務職 | 2. 営業職 | 3. 販売職 | 4. 技術職 | 5. 専門職 | 6. その他 |
| 33% | 20% | 14% | 2% | 12% | 16% |

問3 現在の勤め先の業種は

- | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|---------|
| 1. 建設 | 2. 製造 | 3. 電気・ガス | 4. 運輸・通信 | 5. 卸・小売 |
| 6% | 8% | 2% | | 20% |
| 6. 飲食・宿泊 | 7. 金融・保険 | 8. サービス | 9. 公務員 | 10. その他 |
| | 8% | 24% | 10% | 22% |

問4 現在の勤め先の従業員数は(企業全体)

- | | | | |
|----------|-------------|-------------|---------|
| 1. 99人以下 | 2. 100~299人 | 3. 300~999人 | 4. 千人以上 |
| 37% | 28% | 6% | 28% |

問5 勤続期間は ()年 ()月

問6 転職経験は 1. ある 2. ない
 12% 86%

問7 大学卒業後、最初の勤め先を選ぶ際に、影響を与えたものについておたずねします。1~7のそれぞれについて、「1. 大いに影響を受けた、2. かなり影響を受けた、3. 少し影響を受けた、4. 影響を受けなかった」のいずれかに○をつけて下さい

	大いに受けた	かなり受けた	少し受けた	受けなかった	
両親などの家族の意見、話	1	2	3	4	(1.29)
大学の先生の意見、話	1	2	3	4	(0.88)
友人や大学の先輩などの意見	1	2	3	4	(1.12)
テレビ・雑誌、新聞、本などの情報	1	2	3	4	(1.02)
求人情報誌などの情報	1	2	3	4	(1.26)
インターネットの情報	1	2	3	4	(1.18)
アルバイト、家事手伝いなどの体験	1	2	3	4	(1.08)
企業訪問、求人説明会などで会社から	1	2	3	4	(1.38)

直接聞いた話

問8 現在勤めている職場について不満に思っていることは(あてはまるものすべて)

- 1. 仕事に自分が生かせない 5%
- 2. 仕事に意義を感じられない 16%
- 3. 仕事に創造性が発揮できない 19%
- 4. 自分の意見や業績、資格が正当に評価されない 14%
- 5. 会社や上司の方針は納得できない 49%
- 6. 業界や会社の将来に期待できない 30%
- 7. 仕事がきつい 40%
- 8. 給与や昇給がよくない 42%
- 9. 職場環境がよくない(危険、汚い、暑い、寒いなど) 23%
- 10. 労働時間が長い 28%
- 11. 通勤時間が長い 9%
- 12. 時間外のつき合いが多い 7%
- 13. 個人生活が充実できない 26%
- 14. 会社に魅力のある人がいない 12%
- 15. その他(具体的に:

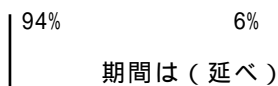
問9 仕事についての考え方などをおたずねします。 ~ のそれぞれについて

「1. あてはまる 2. どちらかといえばあてはまる 3. どちらかといえばあてはまらない 4. あてはまらない」のいずれか1つに○をつけて下さい

	あてはまる	どちらかといえば あてはまる	どちらかといえば あてはまらない	あてはまらない	
仕事はお金を稼ぐためのものであって、 面白いものではない	1	2	3	4	(1.98)
会社のために自己を犠牲にしても、 人並み以上に働きたい	1	2	3	4	(1.88)
高い役職につくために、少々の苦勞を してもがんばるべきだ	1	2	3	4	(1.80)
勤務時間が短いことが何よりも大切だ	1	2	3	4	(1.98)
職場の同僚、上司とは勤務時間以外は つきあいたくない	1	2	3	4	(2.02)
同じ会社にずっと勤めたい	1	2	3	4	(1.76)
他の条件が同じなら、少しでも通勤時間が 短い会社を選ぶ	1	2	3	4	(1.67)
会社がもうかることが自分の利益にもつながる	1	2	3	4	(1.84)
自分の仕事が残っていても定時になったら 帰るべきだ	1	2	3	4	(1.71)
専門的な知識、技術を身に付けることは 大企業に就職することより価値がある	1	2	3	4	(1.67)
おもしろい仕事であれば、給料が 安くてもかまわない	1	2	3	4	(2.25)
仕事は会社に役立つことを第一に考えるべき であって、自分の興味・関心のためにするもの ではない	1	2	3	4	(2.26)
これからの仕事では、ユニークな発想をする ことがとても大切である	1	2	3	4	(1.84)
同じ仕事で給料が今より1割高い会社があれば 転職する	1	2	3	4	(1.96)
職場の上司・同僚が残業しても、自分の仕事 が終わったら帰るべきだ	1	2	3	4	(1.84)

問10 大学在学中にアルバイトの経験は

1. ある 2. ない



(それぞれあてはまるものすべて) (1)(2)(3)の合計%を記した

	受けたいと思う援助	受けた援助	受けたいと思った援助	
就職全体についての相談	1	1	1	79%
産業、職業の内容についての情報提供	2	2	2	63%
企業の概要についての情報提供	3	3	3	69%
求人情報の提供	4	4	4	77%
就職後の労働条件についての情報提供	5	5	5	69%
就職後のキャリアコースに関する情報提供	6	6	6	42%
職業適性についての検査・指導	7	7	7	63%
面接、採用試験についての指導、情報提供	8	8	8	75%
職場見学、実習の実施	9	9	9	54%
その他(具体的に)	10	10	10	

問13 あなたの性別は

1. 男 2. 女
41% 59%

本調査は2003年度富山第一銀行奨学財団の研究助成金を得て実施された。